

MfG_J_Kawai_Tsuginosuke_and_reformation_Ver2.pdf (New-version)

MfG_J_Topics in Kofuku-Ji Temple

(MfG_J_Kawai_Tsuginosuke_and_reformation)

継之助の軍政改革と武器進歩のストーリー

基本のお話

A. 藩の武装中立について

補足 作成英文

B. 互尊止戈、兵戈無用と止戈為武

解説

1. 長岡・河井継之助記念館での解説

2. 河井の財政改革に先行した長岡藩財政改革

3. 河井継之助の行った改革のリスト

4. ライフルの装備

(1) ライフルの種類

(2) 国内のゲベール銃の入手状況

(3) 国内のスナイドル銃の入手状況

5. 南北戦争と「風と共に去りぬ」(”Gone with the Wind”)

補足 長岡出身の小説家、火坂雅志さんの解釈

只見の地で 「壺中天」(2022Sep)

只見・河井継之助記念館

A. 河井継之助記念館で武装中立についてご説明する内容について

ガトリング砲のみならず、他藩も欲しがると最新の元込めライフルなど最新の武器を、小さな譜代大名の長岡藩が、なぜ買おうとしたのか。そして、なぜ買うことができたのか、をお話したいと思います。

長岡藩の卓越した財政力、即金で支払えた信用力、情報力、そして歴代藩主の幕閣での位置。そのなかで、継之助の行動をご説明します。

1. 当時の東アジア情勢、日本のおかれた状況について]

- (1) インドでムガル帝国弱体化、中国で清朝がアヘン戦争等で滅亡寸前、さらにロシアの北海道侵略など、ヨーロッパ列強がアジア侵略を進めていた。日本も、アメリカの開港要求、ロシアの南下で、鎖国政策のみならず、国家存亡の危機にあったことを説明したい。
(但し、その後も欧州では戦争続く)

2. 当時の近代兵器の市場について語るべきこと

- (1) アメリカで、世界最初の近代兵器戦と言われる南北戦争が終結し、黒海沿岸で、ロシア対オスマン帝国の史上最大とも云われた大規模なクリミア戦争が終わり、武器がだぶついていた。～国際的な兵器商人の暗躍。

3. 長岡藩のおかれた状況

- (1) 当時の歴代藩主が、三代続けて幕府老中職につき、海外事情に明るく、また1845年には阿部正弘とともに長岡藩主牧野忠雅も海防掛として、対外問題処理とこれに関わる国内政策立案、海岸防御などを担当。藩主も、独自にロシア視察を目的に、家来を北海道に派遣し、自藩の政策を見直し、藩政改革に取り組んだ。
- (2) 河井継之助は、年貢の収納、訴訟、農民の統制などを担う郡奉行時代からの問題解決能力を買われ、藩政改革を託された。
- (3) 継之助の藩政改革（財政改革、軍制改革、藩内の産業改革など）で、多くの藩が苦しんでいる借金財政を脱していたこと。

4. 長岡藩のとった方針

- (1) 名門譜代大名ではあるが、西国諸藩と会津藩など親幕府の雄藩との仲介をするとともに、内戦回避が外国の侵略回避のために肝要として、武装中立を藩の方針としたことを説明。
- (2) 西国諸藩との交渉も、単なる内戦回避ではなく、日本の歩むべき道を説いた。～西国諸藩の「幕府解体」とは、最期まで一致点を見いだせなかった。京都の公家集団のかたくなな反幕府の姿勢を読み切れなかったことが、長岡藩の壊滅的悲劇の最大要因か。
或いは徳川慶喜、松平容保の人物、人望を見誤ったことも要因か。

軍備増強の背景

黒船来航以前から、諸外国の、日本近海への侵入が頻発していた。西国の藩を中心に、異国一の備えを開始していたが、長岡藩も、新潟湊から信濃川に入るルートを警戒し、いろいろの対策を講じた。長岡藩の軍備増強の基本は、公表こそ行われなかったが、異国対策だったのではないか。

5. 継之助の覚悟

幕末動乱の中、歴代藩主が老中を勤めてきた長岡藩の改革実務を指示された継之助の覚悟。

- (1) 常在戦場～藩士には質朴剛健、自らには常に死を意識して生きていく覚悟。
- (2) 一忍を以て百勇を支う可く、一静を以て百動を制す可し～特に後半部分。
多くの人を動かそうとすれば、リーダーは信念をしっかりとって揺れ動かず、じっと、みんなを見守っていなければならない。
この二つが、継之助の人生を通じての覚悟だったと思う。

6. 展示されている書について

常在戦場、ほか

「一忍を以て百勇を支う可く、一静を以て百動を制す可し」

覚悟を最重要視した言葉だと思う。

五十六はこの言葉を胸に慈眼寺の会議に臨んだといわれている。

継之助が普段から自らに言い聞かせていた座右銘で、蘇老という中国の詩人である「一忍可以支百憂 一静可以制百動」という格言からの引用とされている。蘇老は「百憂」と言っているのを、継之助は「百勇」に変えているが、その心はわからない。

そのほか、

「天下になくっては成らぬ人になるか、有ってはならぬ人となれ、沈香もたけ屁もこけ。牛羊となって人の血や肉に化してしまうか、豺狼となって人間の血や肉をくらいつくすかどちらかとなれ」

「殿様でもご家老でも馬鹿では仕方がない。百姓でも町人でも堅固とした賢いものなら何でも取り上げなければならぬ。一體(いったい)人間は目さえ見れば利口と馬鹿とがわかるものだ」

言葉を残しており、いずれも、明晰な展望と覚悟、を大切にしていたように思う。

7. 継之助の問題解決・実行力

江戸で「東洋道徳・西洋芸術」を称える佐久間象山、松山藩では「藩政、財政改革」の山田方谷に学び、幕末をむかえ時勢がいよいよ煮詰まった段階で、藩は河井を重用。藩の第二弾財政改革と借金返済、禄高改正、軍制改革など、教育で得た知見をもとに、持ち前の問題解決・実行力で実現し、見事に藩主の要請に応えた。当時の日本を見渡しても、どの藩もなしえなかった、

このような卓越した成果がなければ、後の、長岡藩の「武装中立、新政府軍と幕府側の調停役」は、あり得ないのである。

譜代大名の名門であり、幕末の五十年間、幕閣に老中として参画し続けた長岡藩として、幕府を支える側に立たざるを得なかったのである。長岡藩の進むべき道を、国防改革をスピードアップし、藩内の改革と日本全体の改革を進めるため、長岡藩の武装中立、新政府軍と幕府側の調停役として機能することとした藩首脳の意を体し、長岡の南の小千谷・慈眼寺で、新政府軍と交渉したが決裂。長岡藩が藩領南の外れの本陣としていた摂田屋・光福寺で、西軍との戦さに入るもやむなしと決起。これが全てである。

B. 長岡藩の信用力

当時、欧米の商人が倒幕・左幕諸藩に武器を流しており、薩長側でいえばイギリス人トーマス・グラバーが有名だが、新潟港において同盟軍と武器弾薬の取引をしていたのがオランダ人エドワード・スネルである。そして、長岡藩士鬼頭正路の回想に面白い事が記録されている。

「俺は藩の命を受けて、会津の水原陣屋に行って、弾薬を調達しようとしたが、こっちも弾薬が尽きて困っている。会津の者は新潟にスネルという者が居るが、貴藩の河井と交流があるそう。願わくば我が藩の為に便宜を図ってもらえるようお願いして貰えないだろうか俺は逆に嘆願されてしまった。だが、先方に金はない。困った話である。

だが、このままではこちらにもこっちもさっちもいかない。俺は新潟に出向いて、スネルに河井の使者であると言ったのさ。独断でね。そうしたら、スネルは大声で河井様の使者ですか！と大声でいきなり叫んで此方のほうが大慌て。俺は一銭の金も持ち合わせていないと正直に言ったのだが、スネルは構わず、即座に武器の手配をしてくれた。こうして、大砲硝薬三千丁と後操縦四十一丁と弾丸を手に入れることが出来た」

軍事商人 Military merchant、死の商人 merchant of death
 軍事産業 armaments industry、近代兵器 modern weapon
 勃興 The rise a sudden rise / increase in the power
 本陣 Troop headquarters, 本隊 main unit《軍事》
 兵站 Military Logistics, Supply train
 外国人排斥 exclusion (of foreigners)

南北戦争〔19世紀アメリカの〕 American Civil War , 1861年 - 1865年
 アメリカ以外の国では自国内戦と区別して上記の如く表記。
 奴隷制存続を主張するアメリカ南部諸州のうち11州が合衆国を脱退、
 アメリカ連合国を結成し、合衆国にとどまった北部23州との間で戦争と
 なった。この戦争では史上初めて近代的な機械技術が投入された。

普仏戦争(the Franco-Prussian War) 1870年-1871年の10か月。
 たフランスとプロイセン王国の間で行われた戦争である。
 ドイツ諸邦もプロイセン側に立って参戦したため独仏戦争とも呼ぶ
 戦争はプロイセン側の圧倒的勝利に終わり、プロイセンを中心にした
 ドイツ統一が達成され、フランスは第三共和政に移行。

共和政 third republicanism [王制・独裁制に反対]

現在のフランスは、第五共和政

以後、ヨーロッパ諸国の統一と強国化が進む。

阿片戦争(First Opium War) (清とイギリスとの間で1840年から2年間)
 the Opium War that existed between China and England
 中国ではイギリスとの間に阿片戦争が起こり香港島が奪われた。

The Opium War broke out between Britain and China, and the island of Hong Kong was taken by the British

阿片の密輸が原因となった戦争。アロー戦争を第二次とみなして
 第一次阿片戦争とも言う。

アロー戦争((Second Opium War)は、1856年から1860年にかけて清とイギリス・フランス連合軍との間で起こった戦争。

清は最後の統一王朝(1644年から1912年)、阿片戦争で弱体化。

Indian Rebellion (1526年 - 1858年)

ムガル帝国 (Mughal Empire トルコ系イスラーム王朝 1526 - 1858) が

滅亡し、イギリスがインドを直接統治することになった。

[作成英文]

Koufuku-Ji Temple and the civil war, the Boshin-no-Eki.

We are now standing in front of the historical spot where in 1868, the Nagaoka feudal domain decided to outbreak the battle. It was one of the largest battles in the civil war (the Boshin-no-Eki).

Unfortunately after half-year, the Nagaoka feudal domain was defeated in the war.

Nagaoka feudal domain

Nagaoka feudal domain decided to outbreak the battle. It was one of the largest battles in the civil war (the Boshin-no-Eki).

Unfortunately after half-year, the Nagaoka feudal domain was defeated in the war.

In the first half of the nineteenth-Century, Japan worried about the events occurred in China and India. (Opium war, Indian Rebellion)

Russia also invaded Hokkaidou iteratedly

And at last, In 1853, Perry came to Japan from the Us, having a letter of the president.

During more than 200 years ago, Japan had been keeping long-year-isolation policy .

At that time, the Europeans were overwhelmingly stronger than Japanese. Various countremeasures against invasion of the foreign countries group, were boiled in whole country in Japan. And the increasing conflict had moved into the large- scale civil war.

Around this time the feudal lord of the Nagaoka feudal domain for three successive generations were appointed the Minister of Foreign Affairs and Defense in the Tokugawa shogunate.

A lot of information about invasions of foreign countries including Russia, Europe and the US is flown into the Nagaoka feudal domain .

Therefore the Nagaoka feudal domain had thought that Japan should prepare against these invasions. And thought that Nagaoka feudal domain shouldn't go to civil war inside the country.

Instead, he had insisted armed with war avoidance inside the country.

The Nagaoka feudal domain had tried to persuade negotiations with the new-government group, however at last he failed in pacification with the opponents.

And here, Koufuku-Ji Temple, the Nagaoka feudal domain had declare war. After half-year, the Nagaoka feudal domain was defeated in the war.

武装中立 armed neutrality <---> unarmed neutrality

On the other hand, new-government group insisted first on defeat of the Tokugawa Shogunate system and second on preparation against invasion of foreign countries.

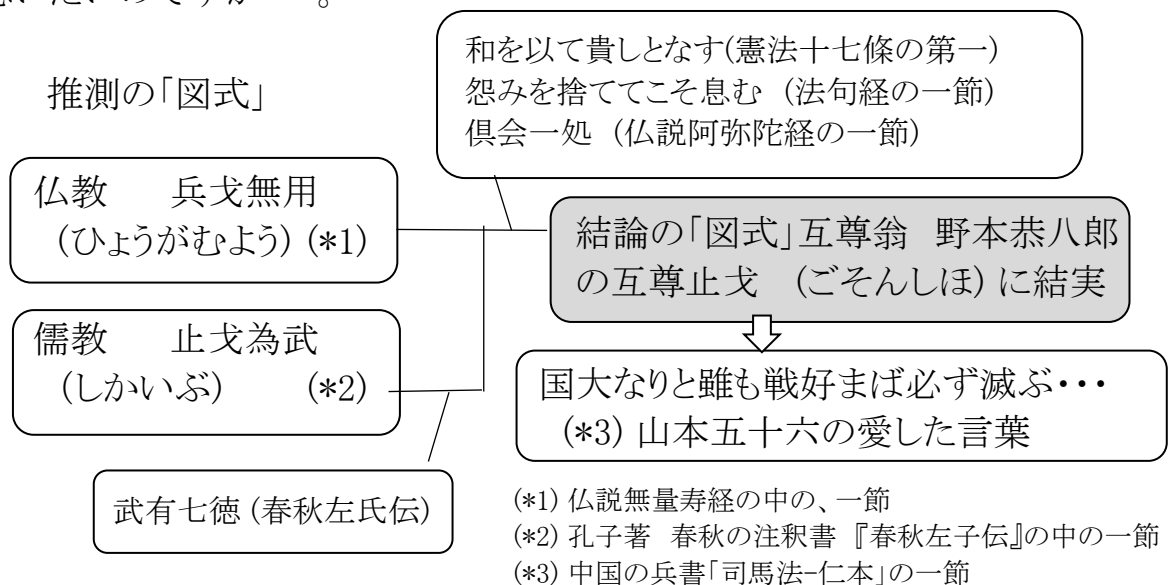
1. 互尊止戈、そして国大なりと雖も、の心を探る

「互尊止戈」(ごそんしほ)、お互いの個性を認め合い、相互尊重の精神を貫けば戦争は止むものだ。互尊翁は、これを書にし、日本が軍事を優先し、政治の武力解決に突き進むことへの警告を発したと言われています。この互尊止戈の考え方が、どこから生まれたのか、気になっていました。

そんな中で最近、ある仏典のなかに、不戦・非戦、そのための仏教的人間形成の言葉として、「兵戈無用」(ひょうがむよう)という言葉に巡り合いました。武器も軍隊もいらない、という意味の言葉で、浄土真宗のお経の第一に挙げられる仏説無量寿経の中の一節です。学者でもあった高僧・木曾恵禅、篤信の教育者・星野嘉保子との交流から浄土真宗に深く触れ、自らも熱心な信者でもあった野本恭八郎にも、なじみのあるお経です。彼らとの聞法の討議を通じて、これらが恭八郎の心の中に、互尊止戈として結実したように思いました。

また恭八郎は、幼少時から小国の生家や藍沢南城の三余堂で儒教を学びました。春秋の注釈書『春秋左子伝』にある言葉の止戈為武(しかいぶ)、武有七徳で、武が争いを止めることにこそあることも、学んだと考えるのが自然です。全ての子供に戦争や病で先立たれた恭八郎は、晩年、亡くなった三男と同一年の山本五十六が帰岡し訪問してくれると、大変喜び話し込んだそうです。

「国大なりと雖も戦好まば必ず滅ぶ」、藩の儒家に生まれた五十六は、軍人の道に進み、この言葉を好みました。恭八郎との対話などを通じて、武装するも「不戦・非戦」という武装中立の決意を、この言葉に託すようになったのでは、と思いたいのですが・・・。



	平和を得る道	中立	
浄土教仏典	仏の道による	非武装中立	野本恭八郎
儒教・春秋	武による	武装中立	山本五十六

2. おのおのの言葉の訳文と補足

(1) 仏典の教え、兵戈無用（ひょうがむよう）～仏説無量寿経の一節

・該当部分の現代語訳

仏が歩み行かれるところは、国も町も村も、その教えに導かれないところはない。そこは、穏やかで国豊かに民安くして兵戈用いることなし。

(2) 仏典の教え、怨みを捨ててこそ息む（やむ）～法句経の一節

・該当部分の日本語訳（仏教学者でもある中村元先生の訳）

実にこの世においては、怨みに怨みを以ってせば、ついに息むことなし。堪え忍ぶことによってこそ怨みは息む。これは永遠の真理なり。

・1951年のサンフランシスコ講和会議で、当時のセイロン代表も引用

人は愛によってのみ憎しみを越えられる。憎しみによっては越えられない。

敗戦国日本への賠償問題などを討議する場で、当時のセイロン代表の演説が会議の流れを決め、日本は分割統治や多くの連合国からの賠償金請求を免れることになった、日本が忘れてはならないこと。

(3) 仏典の教え、俱会一处（くえいっしょ）～仏説阿弥陀経の一節

・「俱（とも）に一つの処（ところ）で会（あ）う」というご文（もん）

兵戈無用の、究極の姿のひとつと言えます。

「お墓は別々のところで違うかも知れないが、阿弥陀さまのお浄土で仏さまと成って、また一緒に会えるのです。往（ゆ）く場所は皆同じです。」

(4) 儒教の教え、止戈為武（しかいぶ）～注釈書『春秋左子伝』の一節

・本来の「武」とは、戦を未然に防ぐためのもの

戈（ほこ）を止むるを武と為す、と読み下せます。「止」と「戈（ほこ）」を合わせると「武」という字になることから、「武」という字の本当の意味は「戈」を「止」める＝争い・暴力を止めることであり、国の経済力を整え、インテリジェンスを高め、戦を未然に防ぐ、ということが本来の「武」。

・これは同じく『春秋左子伝』の「武有七徳」、武の七徳にも通じる言葉。

一、暴を禁じ。二、兵をやめ。三、大を保ち。四、功を定め。五、民を安んじ。六、衆を和し。七、財を豊かにす。（但し、武装は忘れていないと思う。）

信長の「天下布武」の真の意図は、「武有七徳」で天下泰平の世を作ること。武力による制圧ではなく、「天下に七徳の武を布き（しき）」、それにより戦のない世を作ること、戦国終結への強い意思の表われと言われています。

1. 長岡・河井継之助記念館での解説 170121

知行合一（ちこうごういつ）分離不可分
民は国の本 吏は民の雇

ガトリング砲 アメリカが南北戦争の使用品を海外販売。
日本に三台、うち二台が長岡藩。

ガトリング砲 アメリカが南北戦争(1861-65)の使用品。
日本に三台、うち二台が長岡藩。3000両/台、2-3億円/台と高価

一階の継之助全身像 平成21年、友の会で募金・製作 157-158cm
銅像の制作者は、長岡市在住の峰村哲也さん
左手は刀のつかに～刀は抜きたくない。右手は望遠鏡を持つ～未来を見つめる
ブーツは長崎で購入したとされる
佐賀で写真も撮っている
当時は魂を抜かれるなど嫌う人が多い中で、進取の気性。

知行合一を指向する陽明学を知ったことが、継之助の人生の契機。

生涯年表

ポイントは、いくつかの騒動平定 宮路、山中の大規模な農民いざこざ、
支藩の小諸藩の跡目争いの調停

慶応5年 小千谷談判決裂

手渡そうとした、藩主の署名入り文書
末尾に、外国の侵略に対処すべき今、国内で争っている時ではない、と
いう内容。「日本国中、協和合力、世界へ無恥の強国になるならば・・・」
不戦を訴えたが、大将の山縣有朋が長岡に到着しておらず、
軍監の岩村に受け取りを拒絶された。
会津、桑名、米沢とともに戦う
落城の後、八丁沖から894名で奪還するも、破れ会津へ 享年42歳。
会津に同行の召使は栃尾の農民二人。その一人が外山脩造。
「トラや、これからは商いをせよ」
このトラが阪神タイガースの虎になったと、星野仙一さんが
話したという。
アサヒビール 市内消費一本につき1円を米百俵財団に寄付。

燕の豪商・今井家から調達した軍備費は一万両という。
6億～10億円。

富国強兵と民衆安住

応援団 加山雄三さん、林修さん

林修さんが継之助を何度かテレビで取り上げたおかげで、来館者が増加。

一階の三幅

徳川十七将の図
常在戦場

普段は質素に
教育が大事

一忍を以て百勇を支う可く、 五十六も好んで揮毫した
一静を以て百動を制す可し

一階の江戸後期年表と絵の説明

上段 盆踊り、蔵王神社参詣に城内集合、町祭り
いずれも武士と町人が分け隔てなく楽しんでいる。

1843（天保14年）17歳のとき、新潟が幕府領となる。

同心町の出火で、自宅も焼ける

盆踊りは、武士と町人の団結のしるしで、蔵王権現のお祭りで、城の中を町民に開放し、
行列の先頭を整列させ、隊列を組んで蔵王に出発。

城は行政と集会～ このコンセプトはアオーレに引き継がれる。

一忍可以支百勇 一静可以

1808 文化5年、崇徳館 現ヤマザワのところに 9代忠精が創立
1808年、全国で8番目に開校している。
当時、藩主は老中に就任し、外交情報分析のできるよう、種々の学問。
人財と文武と富国
平成21年 第八回の藩校サミットを長岡で開催
武士としての心構えより、自由な広範な学問。 学派は両方教える。 陽明学も教える。

防衛、対外担当の殿さまは、どういう人材を育てようとしたか。
優秀な子は江戸へ遊学させる ～小林虎三郎は佐久間象山塾の塾頭になった。

写真家ベアトの、愛宕にあった「江戸の中屋敷」を掲示
～時代劇のカットにも使用されている、珍しいもの(下屋敷は蔵前にあった)
備中への旅に父親に50両を無心する手紙 街道、水運が発達し、
街道が整備され、為替もあったことを示している。
塵壺という日記・メモ書き 展示はコピー、現物は保管
西国への旅の途中でミノを購入し、方谷のところに置いてきた。
そのミノが、近年、先方から一、これは長岡のものということで、返還された。

禄高改正 ～家老の禄高を減らし、下級武士へ
戦準備は家老が行うものとされたが、それを改め、禄を再構成し、
軍備は殿さま直轄とした。
戦死は殿さまが補償する

商権・株の規則を改め、誰でもできるようにした。
～戊辰で負けても復興が早かった要因

新政府あての書状 国の中で争っている場合ではない

城下地図

家臣団
高野家、河井家の位置と城の外郭
金峰神社、平潟神社、千手観音と参道、興国寺、眞照寺

二階の銅像

渡辺徹作 1935 美術学校彫像科卒、1961日展会員
1942 新潟の実業家、高山藤七郎が製作を依頼したもの
武石弘三郎は、1901年(明治34年) 卒。1

友人

三島億二郎(-2, 二歳年配)、小林虎三郎(+1)、小山良運(-1)、
鵜殿団次郎(+4, 4歳年少)

河井継之助 駆け抜けた蒼龍

2005年12月のTVドラマ
2012年12月の死去は、長岡にとっても残念。

五間梯子の由来

郷土資料館は鶴ヶ城をまねた博物館。
土塁、石垣の一部を使用。

旅行 20代は東北、30代は江戸、西国

方谷が備中から出ているときに、四国、九州を旅する。
長崎を見聞. 佐賀では反射炉に感動。
手紙で金を依頼、路銀を受け取るということは、通信、為替がきちんと
機能していたということ。

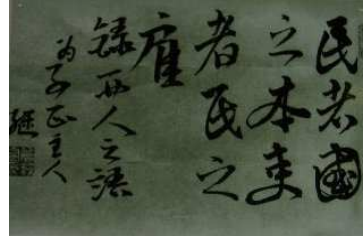
藩政改革の内容

高い志、仲間を作れという、方谷の教え。

軍制改革、財政改革
 規制緩和により、商売を奨励。
 ～戊辰で負けても復興が全国でもトップを進んだ、早かった要因が、ここにある。

郷土資料館にある書 「民は国の本 吏は民の雇」
 西欧の商人と交流して、日本の「子正」という儒学者のために
 西欧の民主主義とはこういうことだと語った言葉だそうです。

郷土資料館にある
 「民は国の本 吏は民の雇
 西人の語を録す 子正主人に為す」



2. 河井の財政改革に先行した長岡藩財政改革

吉田町史 通史編上 第3章 産業と交通の発達

(p393 より抜粋、加筆)

武家金融とはいうが、内容は長岡藩をはじめ諸藩への大名貸しのことである。今井家の長岡藩への融通は、文化十二年(一八一五)九月の今井孫兵衛・亀倉喜左衛門・与左衛門の三名への金四二七両余の返済の内渡金が初見である。その後、文化十四年、石高割才覚金上納に対する返済金六両余が今井家の当座帳にみえる。

文政六年六月、薄から五か年賦の御才覚金一〇一六両の仰せ出されがあり、吉田組は二五四両の割当金であった。今井家では、自家の負担金の外に、割元へもかなりの融通を行い、吉田組は負担金を完済している。

長岡藩への金融は、郷中、長岡町、長岡藩士と並んで、今井孫兵衛・杉山惣九郎・亀倉記左衛門の三名が連名で才覚する場合が目立つ。文化十二年から天保十五年ころまでこの三名からの才覚金の上納額は多い。三名の献金額は今井家と杉山家が同額で、亀倉家は両家の半額という場合が多い。文政八年(一人二五)暮れ、三家で合計三〇〇両の才覚金を納めたが、今井家・杉山家は一二〇両ずつ、亀倉家は六〇両であった。文政十一年、江戸役所への三〇〇両の才覚金上納の場合も同額の割合であった。文政年間の三家による才覚金の合計は一人〇〇両余となった。文政九年、江戸御勝手要用金二五〇両の才覚の場合は、今井家・杉山家は一二五両ずつ、亀倉家は五〇両を才覚した。このような三家が突出した金額の才覚は、天保年間(一人三〇～四三年)も続いている。嘉永年間(1848年から1855年) になると、今井家のみが多額の才覚金上納をするようになっていった。嘉永三年(1850)、郷中人万両の才覚金の要請に、今井家は七か組と並んで、一個人として一 万両の献金を要請された。これに対して今井家は、二月から六月まで六回分割で合計一万両を用立てている。このうちのかなりの分については、差上切りという無返済の形態に変更していった。もっとも、十一月になると、今井家が二五〇〇両の差上切りを嫌ったものか、割元富所家が替わって献金している。その後も今井家の長岡藩への献金は多額であった。

(大地主に借金して東大新江の開発は1849年から始まった)

御勝手元方就任と藩財政の再建

安政二年(1856) 段階で長岡藩の借金は実に二〇万両 に達していた。その利息だけでも年五万両であった。藩は当座のこの五万両が返済できれば、俟約によって財政建て直しも算段できたとした。しかし、この五万両の金が才覚できなかった。

そこで、安政二年、藩はこの出金を藩内随一の富裕者今井家に求めた。あまりの高金額に応じることができないと固持したが、その一方で今井家は戚の富永村庄屋田辺与三兵衛を通じて、吉田村割元富所平次左衛門と共に長岡表へ登らせて真意を藩に伝えた。

すなわち、五万両という大金の才覚はおぼつかない。二～三万両を無理に献金しても、これまで三万両、八万両の才覚金を上納ではどうにもならない。ついては、富所平次左衛門と今井孫兵衛に御勝手向きについて全てを任せてくれるならば、精勤して藩の立ち行く方法をしっかり作っていく所存であるので、任せてもらえないかと申し出た。藩は、この申し出を受け列座衆が評議の結果、同年十月、今井孫兵衛・富所平次左衛門へ御勝手元方・御勘定所御金取扱を仰せ付け、金銭出納に関する全権を二人に一任し、田辺与三兵衛を用務役とした。

二人は、田辺与三兵衛とともに登岡して、長岡に常勤のうえ財政再建にあたった。

まず、御勘定所の組織改革を実施した。それまで勘定所は納方・集方・御雑用方・御切符方・江戸役所の五部署に分かれていたのを、江戸・長岡の御勝手方を統一した上、本方・納方・払い方の三部署にまとめてしまった。本方は米穀の払方、金子の才覚方、借財の返済方という金銭のやりくりを専門に行う。納方は年貢収納米大豆や諸役銀等の取立を行う。払方は灘用費用、諸配布・渡し物等の払いを専門に行う。というように組織の簡素化を図った。そして、金銭、米穀等の移動は全て勘定頭が掌握することとした。役人の数もそれまでの二一人から七人に減じ、納方二人、払方二人、江戸詰め二人、大坂定府一人とした。そして、今井・富所・田辺の三人は主に本方を担当した。安政四年四月にそれぞれ、大口の借金の利下げや返済延期、年賦繰り延べなどの交渉を精力的に行い、安政三年九月から十二月にかけて、かなりの成果を上げて、村松氏へ書簡で報告した。長岡に残った田辺与三兵衛は孫兵衛の代人として国元の金主と交渉して、利下げ、返済延期や繰り延べに成功していった。しかし、交渉に成功しても次から支払うべき金子が底をついている状態であった。

田辺与三兵衛は、孫兵衛の代人として妻を伴って長岡城下に常駐して、金穀差配方を勤め、巻・曾根両代官所支配下の御蔵の年貢米の全部の払い下げを担当して、商人との勘定の交渉を一手に行った。そして、勘定方へ、若しくは今井家を通じて上納した。田辺与三兵衛はその後も孫兵衛代人として主に米穀払方を務め、

江戸・大坂への入用金の送金をよくし、借金の交渉に成功して

いった。平次左衛門と与三兵衛は、安政五年には出府して、江戸表の財政状況の改善に成功し安定させていった。

今井孫兵衛は慶応四年正月で御勝手元方を退いたが、実務を捌いていたのは、大方、田辺与三兵衛だったようである。

長岡藩の献金に対する身分の昇格も献金額に相当するものであった。文政八年五月、それまでの献金によるものであろう、吉田村役人一同から割元の代理ともなる立場上庄屋格が適任であると昇任願いが代官所へ提出され、翌六月仰せつけられた。文政十二年にはそれまでの才覚金上納に対して二人扶持の加増があった。天保十三年十一月、両家揃って七人扶持の加増を受けた。亀倉家はこの時点で三人扶持となった。そして、天保十五年五月、両家が同時に代々割元格に昇任した。今井家の後見人孫四郎も割元格となった。さらに弘化二年には、孫兵衛の養子八作までが割元格と五人扶持を受けることとなった。嘉永二年、一五〇〇両の献金、嘉永三年の郷中人万両才覚金の内一万両の上納によって、今井孫兵衛は代々割元准座・永々階子御相印御免となった。階子御免とは藩主牧野家家紋の梯子御紋入りの旗五禅と提灯をいただき、船や荷物に掲げることを許可されることである。

そして、ついに、才覚金上納や献金で長岡藩の財政を改善する事が不可能となり、藩財政の根本的な改革のため、今井家、富所家、田辺家が乞われて、安政二年(一人五五)九月、藩財政改革をまかされることになり、今井家は藩御勝手元方、御勘定所金穀払方に就任すると、新知禄高三〇〇石、加扶持二〇人扶持、代々御大組格の藩士となった。また、割元富所平次左衛門は御勝手元方御勘定所御金取扱方を仰せつけられ、長岡常駐を命ぜられ、御直高一〇〇石、御大組格を仰せつけられた。富永村庄屋田辺与三兵衛は、御勝手向御用弁を仰せつかり、郡奉行直支配・苗字帯刀御免となった。与三兵衛は孫兵衛代人として長岡町に詰め切りで役務に専念、安政三年十二月、金一両の手当をいただく。安政四年九月、水原方面の高額借金の交渉に成功したうえ、非常準備金として一〇〇〇両を献金した。これによって、与三兵衛は五人扶持を下され、近 奉行組入れとなった。翌五年二月には、御勝手方手助を仰せつかり、この年から与三兵衛夫婦は家中の人別帳に書き入れられ 万延元年(一人六〇)、与三兵衛は、米穀払方、江戸表での働きを認められ、都合一〇人扶持に加増された。文久二年(一人六二)三月、与三兵衛は、さらに加増されて都合一三人扶持を下された。これら

によって、元治二年(一人六五)、富永村庄屋を務める ことになった与兵衛の子与三左衛門は代々父子苗字差免・割元並上座を仰せつけられた。

4. ライフルの装備

(1) ライフルの種類

1) 先込式滑腔銃(代表的な銃:ゲベール)

1777年オランダ制式化

性能的には発火方式以外、火縄銃と大差ない性能

2) 先込式ライフル銃(代表的な銃:ミニエー、エンフィールド)

先込式ながら銃身にライフルリングを切り、椎の実形の鉛弾を使用することにより、射撃距離と命中精度が飛躍的に向上。

1846年フランスで開発。

エンフィールド銃は、ミニエー銃の英国版の改良型

3) 後装式ライフル銃(代表的な銃:スナイドル、ドライゼ、シャスポー)

最大の欠点である先込式を改善した後装式ライフル銃。

装填間隔が短くなり戦闘能力向上に大きく貢献した単発式小銃。

ドライゼ : 1841年開発、世界初のボルトアクション後装銃

スナイドル : 1866年、英国制式化

4) 後装式連発銃(代表的な銃:スペンサー)

後装連発式のライフル銃で、近代的軍隊の求める連続発射機能を備えた小銃。

1860年、アメリカで開発

(2) 国内のゲベール銃の入手状況

日本では、幕末期に西洋軍制を導入した江戸幕府や藩が相次いでゲベールを購入した。1831年に砲術家の高島秋帆がオランダから輸入したのが始まりとされる。

幕末の早い段階から輸入が開始され、既に施条銃の時代となっていた西欧から旧式のゲベールが大量に日本に輸出された。

輸入が始まった頃は薩摩藩・長州藩や幕府軍で採用されていたが、薩摩・長州では早い段階から、ゲベールよりも新式で命中率・射程距離に優れた施条銃であるミニエー銃やスナイドル銃へと更新を進めた。幕府軍も第二次長州征討以降は積極的に条銃を導入し、施幕府陸軍の歩兵隊などに支給した。そのため戊辰戦争時点ではゲベールは時代遅れの銃となっていた。

(3) 国内のスナイドル銃の入手状況

スナイドル銃は戊辰戦争期にイギリスを通じて薩摩藩に導入され、先進的軍備の整備を目指した長岡藩や、仙台藩の額兵隊など幕府諸軍によっても使用された。また後発で洋式軍制を導入した小藩が初期導入しているケースもあった(上山藩・郡上藩など)。

長岡藩は、兵制の改革鶴殿団十郎によるフランス式の兵制を推進した。兵学所、練兵所の設置、西洋式装備の推進に努めた。

各戸に最新のミニエー銃を配備。最新式の後装式ライフル銃であるスナイドル銃も入手していた。

大砲のほか、当時、国内に3門しかないガトリング砲の2門を装備。

(4) 戊辰戦争勃発少し前の欧米列強の小銃装備状況

2)の先込式ミニエータイプのライフル銃が主体だった。

フランス軍のミニエー、イギリス軍のエンフィールド、アメリカのスプリングフィールドが代表的な銃として挙げられる。

更に、ヨーロッパ各国は、1)の旧式の先込銃ゲベールタイプを大量に保有していて、その処分に苦慮していたとされる。

5. 南北戦争と「風と共に去りぬ」(”Gone with the Wind”)

1939年製作の名作中の名作、「風と共に去りぬ」は、南北戦争の始まる頃から終結後の時代背景の中で描かれる物語で、マーガレット・ミッチェルが9年がかりで完成させ、1937年の出版と同時に爆発的な人気を博して聖書につぐベストセラーになった。

日本でも、南北戦争の敗戦とその後の南部再建の姿が、太平洋戦争敗戦と戦後復興という日本の歴史に通じる部分があることなどから、広く愛読され、何度も舞台化されている。

イギリスで生産された、1章 2)の先込式エンフィールド銃の総生産量は150万挺といわれているが、その内の六割の約90万挺がアメリカに輸入され、南北両軍で使用された。

しかしながら長期に渡った南北戦争の終了によって、アメリカ政府は南軍から没収したエンフィールド銃その他の不必要な火器を大量に抱え込んで、処分に苦慮していた。

3. 河井継之助の行った改革のリスト

	主な改革	改革の内容
藩財政の改革	藩財政の改革	家臣一同に倹約を奨励。領民には藩財政の公開と、藩主藩民が改革に取り組む証として、藩侯の調度品の売却を進める。東北で売りさばきお金を作ったのは1868。
軍政改革と、禄高の改正、それに伴う人材の育成と登用 (教育の改革)	兵制の改革	鵜殿団十郎によるフランス式の兵制を推進した。兵学所、練兵所の設置
	西洋式装備推進	各戸に最新のミニエー銃を配備。東洋に3門しかないガトリング砲の2門を装備(各戸配備は1867年12月)
	禄高の改正	軍隊洋式化の結果、従来の身分と一体となった家禄は不都合。藩士の禄高をほぼ100石に平準化し、兵の統制を容易にした。自らの禄高は家老になっても120石増減なしに据え置いた
	人材の登用	禄高に関係なく、実力本位で藩士を登用し、適任適所の人材配置をした
	学制の改革	藩校崇徳館に造士寮を設け、寄宿制により人材の育成をした(維新後の教育の系譜に繋がる)
産業の振興	河税の廃止	収入源だった信濃川の通行税(河)税を廃止し、自由な通行を推進することで町を活性化させる
	中ノ口川改修	村上藩と協力して、中ノ口川の川幅を均衡にし、樋を布設して、信濃川の洪水や海水の逆流を防ぐことで米を増産した
	株の特権廃止	舟乗、魚屋、湯屋、髪結、青物問屋、鬘付油の6業種の株に対する特権を廃止し、自由競争にした
	町制の改革	不正の噂がある検断職の免職。町役人の人員削減、給与規定の見直し
賄賂、不正をたどす	賄賂の禁止	慣習化していた賄賂、饗応、請託を禁止。郡奉行に就任した直後に起こった山中騒動では身をもって実践した。米寿の祝いまで付き返し、後で詫言した話まである
	毛見(けみ)廃止	毎年収穫前に毛見役人が、稲作の状態で年貢を決める制度を見直し、過去の収穫を参考にして、一律に年貢を下げた。
	水害免税不正の指摘、相互扶助制度	水難を理由にした手当米の支給を廃止、相対救(あいたいすくい)という組の相互扶助を義務づけた
風紀の取り締まり、善政	賭博の禁止	風紀の害毒の多さを説き賭博を禁止。自ら博徒をよそおい賭場に入り、通達の徹底を確認
	遊郭の廃止	女郎屋、芸者置屋、貸座席屋を廃止し、業者に転業の資金を貸与、娼婦には旅費を与えて家に帰した。遊郭通いで有名な継之助が自ら禁止
	寄場の設置	犯罪者を罰するだけでなく、更生と職業訓練をさせる寄場を設け、放免の日には労役の積立金を与えた。寄場の最初の場長は、後の阪神電鉄創業者の外山寅太(脩造)
	贅沢の一掃	町民にも徹底。

参考 <http://www7a.biglobe.ne.jp/~jigenji/kaikaku.htm> 他

2000石→500石、90石並びに25人扶持→95石など

越後長岡藩の慶応改革

越後長岡藩の慶応改革(えちごながおかはんのけいおうかいかく)は、慶応年間に、越後長岡藩の一代家老に抜擢された河井継之助が藩主牧野忠恭、牧野忠訓の信任の下に行った改革。

家老連綿5家(稲垣・山本・稲垣・牧野・牧野)、藩主牧野氏と兄弟分の契りを結んでいた由緒を持つ先法御三家(榎(真木)・能勢・疋田)、及び御落胤の家系九里氏等の高禄の藩士は大打撃を受けたが、軍役を大幅に免除されたために財政上は成り立つことはできたので、実収入には大きな変化がなかったとも云われる。

2000石→500石

1300石から1100石→400石

700石→300石

600石→200石

450石～300石→170石

280石～200石→150石

190石～150石並びに45人扶持→130石

140石～100石並びに38人扶持～28人扶持→100石

97石→100石

90石並びに25人扶持→95石

85石～80石→90石

75石並びに20人扶持→85石

河井継之助 藩財政改革 協力者

補足 長岡出身の小説家、火坂雅志さんの解釈

火坂雅志著「武士の一言」朝日新聞出版

一忍を以て百勇を支う可く、一静を以て百動を制す可し（河井継之助の座右の銘）

…みずから耐え忍ぶことで多くの兵を指捧することかでき、
みずから冷静沈着になることにより、多くの兵を動かすことができる

すばらしい内容で、名文でもありますので、長いですが、引用させていただきました。

河井継之助を生んだ越後長岡藩には、常在戦場という言葉があった。いまでも、
ことに臨む者の気構えとして選挙戦のときなどに使われることがある。

私はこの常在戦場という言葉に、「いつどこであっても、常に戦場と思って火の出る
ごとく激しく戦い、死を恐れずに華々しく散れ」といった意味に解釈していた。多くの
がそう思われているのではないか。

ところが、長岡市にある「河井継之助記念館」の稲川明雄館長によれば、それは
大きな間違いであるという。常在戦場とは、「人生はすべて戦場である。戦いが終
わったあともしぶとく生き抜き、目先の勝ち負けよりも実利を取れ」ということだという。

長岡藩祖の牧野忠成は、徳川家康に仕えた三河武士であった。忠成は父康成とともに
家康に従って奮戦。家康が江戸に封じられると、牧野家も上野大胡二万石の大名となった。
だが、天下分け目の関ヶ原合戦のとき、信州上田城攻めに加わった牧野父子は、
家臣が軍令違反をおかした罪を問われ、そのことが徳川秀忠の関ヶ原遅参につな
がったと糾弾される。以後、牧野家は面目を失い、一時は廃絶の噂も飛び交う
など、家名存続の危機に瀕した。

しかし、じつはここからが牧野忠成の真骨頂だ。汚名を晴らさんものと家を出奔した
忠成は、京都所司代板倉勝重のもとへ行き、その配下として將軍秀忠の娘和子入内の
裏工作や、福島正則の改易に暗躍するなど、幕府の基盤づくりに数々の手柄をあげた。
その結果、忠成は次々と加増され、ついには長岡藩七万四千石の祖となるのである。
この牧野忠成の人生そのものが、たとえ合戦で負けたとしても、安易に自刃などせず、
しぶとく生き抜いて政治力で勝ちをおさめよという、長岡藩の教えとなった。

幕末、官軍と戦って放れ、脚に致命傷を負いながらも、なお戸板に担かれて会津
をめざそうとした河井継之助の姿は、まさしくこの「常在戦場」の精神と合致する。

河井継之助は文政十(1827)年、長岡城下の長町に生まれた。

河井家は百二十石取りの中級藩士で、継之助の父代右衛門(だいえもん)は
郡奉行、新潟町奉行などを歴任した。少年時代の継之助は勝ち気な性格で、
剣術や馬術を学んでも師の教える型や作法にまったく従わず、自分の流儀を押し
通したという。実戦に即していない形ばかりの武芸が、ばかばかしく見えたのであろう。

その根っからの実利主義者の継之助が、深く傾倒したのか陽明学であった。

陽明学は、中国明代の儒学者王陽明が興した儒教の一派である。思想はただそれだけで存在するものではなく、具体的な行動を伴わなくてはならない

― すなわち「知行合一」の考えを特徴としている。

(これだ……)

陽明学のなかにおのれがめざすものを見いだした継之助は、のちに備中松山の陽明学者山田方谷をたずねて学問を深めている。

諸国遊学を終えて長岡にもどると、継之助は御番頭格町奉行兼郡奉行に抜擢され、軍事、民政などの藩政改革に乗り出した。賄賂の温床であった毛見制の廃止、信濃川通行税の取り立て廃止など、新しい施策を次々と断行し、みごとに財政を立て直した継之助は、やがて執政の座につき、「武装中立」をとなえて北越戦争のまったくなかへ身を経じてゆくのである。

その河井継之助の座右の銘だったのが、

一忍を以て百勇を支う可く、

一静を以て百動を制す可し の言葉であった。

この言葉は、北宋の文人蘇洵(そじゅん)が残したもので、軍勢を指揮するリーダーの心得をしめしている。

リーダーというのは、つねに孤独だ。人間である以上は、喜怒哀楽さまざまな感情があるが、人の上に立つ者は自制心をもって感情の括らぎをこらえ、下の者たちの範となる行動をとらねばならない。いつときの怒りでカッとしてもならないし、一度や二度の失敗で意気消沈してもならない。ちょっとしたことで冷静さを失うような者は、はじめから指揮官たりえないということだろう。

逆に考えれば、継之助は自分のなかに感情に流されやすい部分を見いだしていたがからこそ、自戒の意味を込めて、この言葉を座右の銘にしていたのかもしれない。

河井継之助は幕末維新の混乱のなかで、長岡藩の武装中立を構想するが、その夢はかなえられず、官軍との戦いに突きすすんでゆく。圧倒的な官軍の兵力に攻め立てられた長岡城は、奮戦むなしく陥落。

しかし、継之助はあきらめなかった。二カ月後、会津藩、桑名藩などの協力を取りつけ、八丁沖の沼沢地を通して、官軍に占拠された長岡城に夜襲をかけ、一度はこれを奪還することに成功した。困難にあっても、めげず、あきらめず、しぶとく冷静に戦っていく。それこそが常在戦場の真髄であり、継之助の座右の銘にもつながる精神なのだろう。

長岡出身の連合艦隊司令長官山本五十六は、人から書を頼まれると、よく「一忍を以て百勇を支う可く……」の言葉をしたためたという。戦場の現実を知る五十六にとって、河井継之助は尊敬するに足る、郷里の偉大な先人だったのだろう。

補足 只見の地で

(22Sep 春日)

1. 「壺中天」・改訂版

ガイドの会のバス研修で、只見の河井継之助記念館の「壺中天」を見てきました。大きな書でしたが、改めて感じたこと。



司馬遼太郎さんの長編時代小説、『峠』は、1966年(昭和41年)11月から1968年(昭和43年)5月まで『毎日新聞』に連載され、1968年に新潮社で刊行されました。「壺中天」は、その司馬さんが只見を訪れた1974年(昭和49)に、「山水相應蒼龍窟」とともに、揮毫されたものです。

「壺中天」を揮毫した意義を、どのように解釈すべきか、についてですが、司馬遼太郎さんは随筆集、『風塵抄 二』(1996年中央公論社刊)の中の、「壺中の天」という名の章で、次のように書いています。なお、(1),(2),(3)の分かれは、春日が勝手につけました。(初出は1992年8月産経新聞)

(1) 自らの軍歴と年一度の中隊仲間の集まり

(2) その経験の位置づけとして、壺中天の紹介

「自分だけの理想郷というすばらしく肯定的な意味と、極めて狭小で手前勝手の見解という否定的な意味とをあわせ持っている。」と説明しています。

(3) 近代史のなかの「壺中の天」。

日中戦争突入の無謀さを、「明治大正の日本は壺中の天ではなかった。昭和になって国ぐるみ壺の中に入った。」と説明しています。

このように、92年の時点では、「壺中の天」を否定的な意味に捉えています。司馬遼太郎さんが只見訪問で、「山水相應蒼龍窟」とともに「壺中天」という文字を書にしたときの気持ちに、否定的な意味はなかったか、考えさせられます。

2. 只見の地に来て、感じたこと。

実際に、終焉の地の只見を見て、いろいろ感じました。

一番は、地形でした。自分は、山古志のような中山間地をイメージしていましたが、実際は山中の大きな平地で、全く予想外でした。

この辺は、新潟・福島県境で、只見川としては中流域のようです。大規模な洪水もあり、こういう平地が生まれたのでは、とか、想像が膨らみます。

2番目は、やはり、壺中天を筆にしたときの司馬遼太郎さんの心のなか。小説「峠」執筆時とエッセイ「壺中天」執筆時との、時間差、認識の変化でしょうか。

3番目は、記念館の展示解説をして下さった現地ガイドさんの、「継之助愛、長岡愛」に溢れたお話も、よかったです。

田子倉から塩沢まで総戸数292の村に、一万人を超す、長岡はじめ米沢、会津の各藩兵が続々押し寄せ、その食料調達や受け入れ対応がままならない責任を感じて自刃した丹羽族(やから)の悲劇もあったのに、避難軍勢の急場を救った。会津を助ける軍勢として扱い、さらに長岡での三カ月の防戦を、常在戦場の精神あればこそと讃える姿勢は、感謝しかない。話も素晴らしく、ガイドの一つのお手本を見た感じです。医王寺のお墓も、きれいに管理されており、長岡の栄涼寺のお墓との余りの違いに、戸惑いさえ感じました。

八十里越えに向かう敗走のルートについて

2021July 春日 (C)

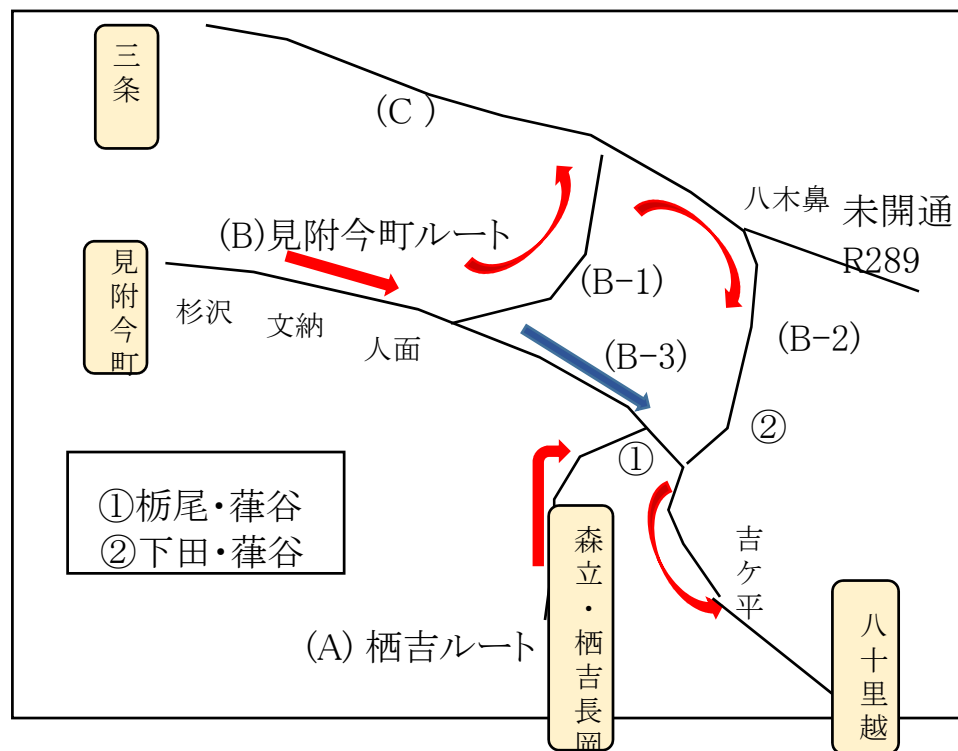
長岡勢の八十里越への道については、(A)栖吉・森立経由の「栖吉ルート」、(B)新町から「見附今町ルート」という説が併立しています。(ルート名は、私が勝手につけた名です。) 藩主一行は、先祖の眠る普済寺にお参りしてからということで(A)栖吉ルートで決まっているようですが、継之助のルート、長岡藩本隊のルート、さらに金沢藩ら諸隊のルートは、みんな(B)見附今町ルートなのか、不明のようです。どなたか、情報をお持ちでしたら、教えて下さい。

河井継之助は、「担送されて、見附、文納、葎谷を経て8月3日、吉ヶ平から八十里越えに入った」、とされる文書があるようです。

見附の文納は、杉沢と人面の間ですから、(B)の見附今町ルートです。

お城の再落城後ですから、家族を引き連れて町から栖吉へ向かうのは危険であり、残った人は皆、この(B)の見附今町ルートだと思うのですが。

しかし、葎谷(むぐらだに)という地名については、①栃尾の葎谷と②下田の葎谷と2つあって、「通ったとされる葎谷が、どこなのか」、つまりB-1,B-2 のルートなのか、或いはB-3のルートなのか、これも、まだ結論は出ていないようです。(当時、B-3は、本当に間道で、八十里越えメインルートの、三条から C~B-2 の一部であったB-2 を使うほうが、楽のようです。ちなみに今年、三条からのR289号の2026年度開通が、正式に告知されました。楽しみです。)



(*1) 葎谷 呼び方は、むぐらだに、もぐらだに、などがあるようです。